

## 産学連携学会中部北陸支部設立に係る『異種異質連携基盤』の考察 —日本列島の多様性を示す2つの軸を考える

○湯本長伯(社会構造設計研究所)、江田英雄(光産業創成大学院大学)、木村雅和(静岡大学)、村上晶子(明星大学)

★本考察の前提となる事項について、既発表も踏まえて簡潔に述べる

※産学連携学会の創設の基本原則＝異種異質の連携融合を「産学連携」という呼び方で総称し、様々なものの異種異質な部分の連携融合がそれまでに無い新しいものを産み出して来た事を踏まえ、我が国イノベーションに貢献することを目指して『産学連携学会』を設立した。大都市中心でなく地域優先主義を掲げたところに、多様性の中に異種異質なものが存在することへの期待と、創造を産む異質性への尊重がある。此の産学連携・異種異質連携の基盤となる『多様性』について、『中部北陸支部』開設を契機に、日本列島に内在する多様性を地勢的な観点から2つの軸(東西南北・列島各地の分布と2つの海)で考える

※異種異質の連携融合が歴史的に高い頻度で起こった場の考察＝「都みや」や「街道カド」を深く参照し、様々な革新を意図的に起こせる場を組織的且つ様々なセクターの連携協力により創出することを目指した。その連携融合の材料となる異種異質の存在は、多様性のある背景・基盤に支えられる。多様性に富む社会背景をイノベーションは必要とする。南北・東西に長く四季に富む我が国の地勢的背景は、その母体としては優れて恵まれている。更に加えて、太平洋と日本海というかなり異なる環境条件を持つ2つの海の存在は、我が国各地の多様性に強い影響を与えていると考えられる。

※イノベーションを語る上で、『創造と連携の経済学』についても補足する。経済発展を説明するヨゼフ・シュムペーターの経済学では、非連続的経済発展を動かすものとして5つのイノベーション・革新(商品・生産方法・市場・資源人口技術・組織)を挙げている。但し、経済学的には2つの経済原理が混ざっている【余剰に拠る再生産準備原理と強奪に拠る再生産準備原理(帝国主義的植民地経済も含む)】しかし生産は消費により初めて価値を生む時代以降でも、創造が生産を推すことは想像され、且つ創造を生む仕組みは『異種異質なものの連携融合』が基軸となる。シュムペーターの『創造の経済学』に対し、『創造と連携の経済学』をイノベーションに向け掲げたい。

※改めて、農業革命に因る生産性飛躍的向上と余剰の再循環～爆発が『経済発展』という概念を生んだとも言える。『狩猟採集』経済数10万年の停滞を破って、生産余剰の再投入がより大きい生産を生むこととなった。と同時に、その集落遺跡には多く二重環濠が見られ、他者の余剰蓄積を『奪う経済』が生まれ、戦争が生まれた。

なお、工業生産に因る桁違いの生産性向上～情報生産と消費という次世代の社会状況は、現状ではその延長上で考え得ると思われる

※以上のような前提の上で、学会と地域・地方の発展を推進する支部創設事業について、その意味と概要を考察する

### 1 産学連携学会・中部北陸支部の設立

a 中部北陸支部は、静岡県を事務局とし、以下の地域幹事を代表構成員として構成されている。

矢野卓真(名古屋工業大学)、上原雅行(岐阜大学)、狩野幹人(三重大学)、林靖人(信州大学)、中田泰子(北陸先端科学技術大学院大学)、江田英雄(光産業創成大学院大学、発起人代表予定者)、木村雅和(静岡大学)、湯本長伯(社会構造設計研究所・静岡熱海オフィス)、

b 構成県は(愛知、岐阜、三重、長野、石川、富山、福井、静岡)であり、現状では滋賀、山梨は含まれていない。



図-1 a, b 中部に位置する各県の概要

### 2 此の地域の役割と未来

中部北陸は日本列島の最も分厚い部分で、それ故に南北・表裏の繋がりが歴史的に必ずしも十分でなかったが、それ故に様々な異なる文化・産物・人材があり、その交流・経済行為は新しい日本を産み出す大きな可能性を秘める。日本は江戸期までに日本海側海運が主要物流・交流ルートとして確立したが、第二次大戦後の激変により太平洋側海外貿易と国内陸路交流が主流となって、日本海側は裏日本となった。

しかし日本海側と太平洋側を適切に繋ぐことで、新しい物流・交流と経済を創出出来ることと、またそれを目指した新しい道路網が、意欲的に計画されていることも見逃せない。

### 3 支部創設の意義

日本列島の最も分厚い部分に新しい支部を創る

ことで、上記のような新しい日本の物流・交流と経済を創出出来ると言える。また大学等の知的拠点も生み出されており、そのポテンシャルは極めて高い。新しい支部は、学会全体を支える新しい知的生産拠点（プラットフォーム）ともなろう。

#### 4 太平洋側日本と日本海側日本の接続＝新しい交流と新しい経済の創出

歴史的に見て、いわゆる表裏日本の接続による利益は少なくないが、中国地方（広島～島根、兵庫～鳥取）や、京都に向かう福井（富山石川）の鯖街道、或いは北の福島県の3地方（いわき・浜通り～郡山・中通り～若松・会津）等々とは異なる、新しい交流と新しい経済の創出が期待される。

全国的に観察すると、中央山脈という障害にも関わらず、列島の南北を繋ぐ幹線交通とは別に、各地に必ずあるのが列島の表側と裏側を繋ぐ（どちらが裏で表かという議論は此处ではしないが）『山越え街道』の存在である。道が険しい故にその前後には必ず宿場があり、無事に山越えを終えた後には酒食の宴を設けるための『岡場所』或いはそれに類する場があったと言える。岡場所は、私娼窟だけでなく、寺社門前地や広小路に展開した盛り場を形成する要因の一つであったとも言われる。岡場所（おかばしょ）とは、「唯一の幕府公認の遊郭である吉原」以外の「非公認の遊郭の総称」である。従って、『山越え街道』はその前後に、『盛り場』を形成していたと言える。

#### 5 地域・地方としての基幹整備の推進

此の地域は永年の間、やや発展が遅れていたきらいもあったが、それだけに可能性を秘めており、現在の主要な国内物流の担い手である道路網は、例えば『中部横断自動車道』が2021年8月末には開通が予定され、また『中部縦貫自動車道』が険しい尾根部分を縦貫する計画であり、既にある東名自動車道・新東名自動車道・中央自動車道に、東海環状自動車道・伊勢湾自動車道など、充実の一途をたどっている。大きな期待と投資があると云って良い。地方・地域第一主義の現れである。

#### 6 日本の表と裏を繋ぎ表も裏も無くす

\*ジャパンコリドールプラン（PHP出版）

列島を貫く高い山地を障壁に表と裏が分断されていたが、太平洋側と日本海側を適切に繋ぐ地域が成功することで、更に大きな日本の可能性を創り出すことが可能である。此处で詳述はしないが、（PHP出版）から34年前に出版したジャパンコリドールプランにも、その可能性を示している。

#### 7 此の支部が内蔵する課題と可能性

これは大きいが、以上のような考察の過程で、未だ不足しているピースがある。此のことを、『近江と遠江』という2つの江(河)、大きな湖について言及することで、指摘だけしておきたい。

内陸に位置する湖は、本来は海が持つ多くの機能を持ち、水運・漁業生産・気候調整等、多くの点で周辺地域に恩恵を与える。京都（平安京）に近い江が近江（琵琶湖）で、遠い江が遠江（浜名湖）である。此の「中部北陸地域」は、歴史的には実は京を支える後背地であり、少し乱暴だが戦国時代を制した3傑（信長秀吉家康）は、いずれも此の地域出身であることが、それを示唆している。とすれば、近江を含む滋賀の地は、京を臨む観点から此の地域の必須のピースであろう。京に繋がる両者を良く知るのが、徳川幕府により遠江から近江に移封された井伊家である。

詳細は今後に譲るが、京都が首都でなくなった現在から未来にかけても、地域連動性の中での重要性は変わらないと考えられるし、一方で滋賀及び山梨も要素として重要である。東西南北に長い日本の多様性と日本海・太平洋という2つの海を持つことで更に独自性を展開した各地の多様性に加え、各地に点在する内陸湖の働きも指摘したい。

【大きな湖を持つ地域は多くはない。地域によっては、湾に近い内海も含まれるかも知れない】青森（十和田湖）、秋田（八郎潟）、福島（猪苗代湖）、茨城（霞ヶ浦・北浦）、長野（諏訪湖）、島根（宍道湖・中海）、瀬戸内海・八代海・錦江湾

#### 8 まとめ

支部設立に関係づけて異種異質の連携融合基盤を見て来たが、此の地域に内在する課題は、山地の険しさもあり連動性が不十分だったことであり、また必ずしも相互にオープンマインドではないことである。むしろ此のこと自体が今後への大きな可能性となっている。此の地域は現状でももの造りの土壌が豊かであり、有力或いは特色ある企業も多くある。学が企業を繋ぐ産学連携の可能性も大きく、地域全体の総合的連携融合の可能性も大きい。しかし更に深くまた具体的に考察し、現実的な立案をするのはこれからである。更に考察を深め議論し大きな実験場と為し得るよう、今後の知恵の結集に期待したい。

【謝辞】本考察は、中部北陸支部発足に関する議論を受けて行ったものである。当支部発足にご協力戴いた方々に深く感謝する。

【参考文献】 ジャパンコリドールプラン、PHP研究所、1987、石井威望、天野光三、伊藤滋、佐貫利雄、月尾嘉男、湯本長伯ほか



\*（各種地図はネット上のフリー画像から引用）